

# 美辞麗句によって「幻出」される風景

——明治三十年代の『文芸倶楽部』を視座として——

湯 本 優 希

## 一、はじめに——美辞麗句と叙景文

明治中期に流行した「美文」は、「紀行文」と近接した場所、もしくはしばしば重なった場所にあるとして論じられてきた。

美文流行に端を発し、同時期には美辞麗句集の刊行も相次いだ。

美辞麗句集とは、渡邊直政編『資料美辞麗句』再版（大学館、一九〇一年）の序で「世の青年文士が作文の資料に充てんがために和漢数百の文章中より、所謂美辞麗句を抜萃して編纂したるものなり」と述べられている通り、文章の書き方を解説した作法書類とは異なる、いわば書き手のための例句・例文集のことである。

前掲資料のように、美辞麗句集の中にはその書名に「美文」を冠し、美文を書くための資料集であると銘打たれているものも多く見られる。そして、美辞麗句集には、梅泉先生『美文紀行文作例』（小川尚栄堂、一九〇一年）や野沢潤編『千景記事紀行文』（岡本偉業館、一九〇四年）等のように「紀行」の名を含むものも散見しており、明治三十年代において美文と紀行文が「美辞麗句」を含む

文章であるという点において近接していたことは資料からも明らかである。また、こうした美辞麗句集は、例えば「梅」「楊柳」など描写する対象物ごとに目次が立てられているが、「風景」を描写するための美辞麗句が多数を占めるものも少なくない。

自身も紀行文を執筆していた小島烏水は、明治三十六年に「紀行文に就きて」において、次のように著わしている。

即ち文字で自然を写生するのは、画で写生して、川が直立して砥石のやうに見えたり、鼻持ちのならぬ偽はつた感情を寓した、所謂美文や、西詩直訳無断嵌入の所謂散文詩や、漢文形容語彙纂ともいひつべき所謂紀行文やらに比べると、遙かに無難に出来るとおもふのである。<sup>①</sup>

烏水はこのように「所謂美文」や「所謂散文詩」や「所謂紀行文」を痛烈に批判しており、このように烏水が評した「語彙纂」のような紀行文に関する批判はのちの同様の紀行文に対する批判の動きへと繋がっているが、ここで着目したいのは、「漢文形容

語彙纂ともいひつべき所謂紀行文」である。この記述から、一方では旅の様子を記した紀行文があり、もう一方で「漢文形容語彙纂」すなわち、美辞麗句集と同種ともいえる漢文の形容語彙が連ねられたような紀行文があるという意識が一般化していたことがうかがえる。

このように裝飾に拘泥し美辞麗句を駆使した文章がいわゆる紀行文にも見られると当時から意識されていたことは明瞭である。当時数多く刊行されていた美辞麗句集に採録されている美辞麗句は、「美文」や「紀行文」と強く結びついていたのである。しかしながら「美文」という文章ジャンルは定義そのものが曖昧さを孕んでいることはいうまでもない。こうした文章ジャンルを越境して用いられていた美辞麗句を追うことによって、明治三十年代における「美文」や「紀行文」というジャンルの相互の関係性と、両者を繋ぐ美辞麗句表現について明らかにしたい。

本稿では、これまで述べてきた美文や紀行文に共通する（風景描写）における美辞麗句について精察すべく、『文芸倶楽部』の叙景文に関する調査を行った。『文芸倶楽部』は明治二十八年一月に博文館より創刊された文芸雑誌である。同年同月に同じく博文館から総合雑誌である『太陽』が創刊されている。

総合雑誌『太陽』では、創刊の時点で「地理」という欄が掲げられ、紀行文や名所案内が掲載された。明治二十二年二月に創刊された『風俗画報』（東陽堂）では、明治三十年五月に刊行された第四百十号より「地理門」という項目が新設され、紀行文や名所案内の類はこの欄に掲載されることとなった。それ以前は主に「雑録」に収載されていたのである。さらに、『淑女』では明治

三十二年五月に「地理」欄が、『中央公論』では明治三十四年一月に「紀行」欄が新設されているなど、明治三十年前後から雑誌において、地理・紀行に関する欄が次々と新設されているのである。この風潮からは、各地のさまざまな風土やその描写に関心が高まっていたことが看取できるだろう。

これに際し、『明治紀行文学集』（筑摩書房、一九七四年）に収載された紀行文が掲載されていた雑誌のうち、『文芸倶楽部』は創刊当初、『太陽』における「地理」や『風俗画報』に新設された「地理門」等に類似する欄は作られておらず、内容も「小説」と「雑録」が主として掲げられた文芸雑誌であった。後に詳述するが、そういった性格の『文芸倶楽部』はしかし、「雑録」に紀行文や名所案内が掲載され、のちに「勝地」などの欄が新設されるに至るのである。また、明治三十一年七月には臨時増刊号として「旅之友」を刊行している等、常に地理や紀行についての変遷が見受けられる。

本稿では、明治期の『文芸倶楽部』における（風景描写）を追いつ、明治三十年代における美辞麗句について考察を試みたい。

なお、紀行文と名所案内は厳密に言えば構成等において異なるものであるが、『文芸倶楽部』では名所案内を謳う欄に旅程が書かれたいわゆる紀行文が掲載されていたり、「雑録」や「雑報」においても名所案内が収録されていたりと、双方が混在しているため、本稿では紀行文と名所案内をどちらも叙景文として捉え、網羅的に調査を行った。

## 二、『文芸倶楽部』における〈風景描写〉欄の概観

まず、『文芸倶楽部』における美辞麗句を含む文章の掲載欄の変遷を概観していこう。

『文芸倶楽部』では、明治二十八年二月号において、「梅花馥郁」という文章が「雑報」に掲載される。これはその題の通り、「蒲田梅園」や「亀井戸」等、主に梅の名所を紹介した文章である。ここでは月ヶ瀬を「香世界」と評したり、「暗香一本の梅」と綴ったりといった、当時、〈梅〉に関する美辞麗句として広がりを見せていた表現が散見される。こうした梅に関する名所の紹介に加え、その周辺をも描いた箇所がある。そこには桃の名所について次のように記されている。

清堀村のほとり桃山は、桃の名所なるが、今より数旬をへば、千朵万朵の紅雲靄々として、花下の白酒、舞歌の少女、又目にするも近きにあるべし。

この「千朵万朵の紅雲靄々として」は、例えば中村巷『美文之資料』（矢島誠進堂、一八九八年）「春光」の項目において確認できる「千珠万朵の花は、炎々として燃るが如く、燦爛として錦繡を織るが如し」「紅雲靄々たり、芳花繽紛たり」のように、春の花を表すものとして比較的用いられやすい美辞麗句である。

このように創刊間もない『文芸倶楽部』では美辞麗句表現が散見する叙景文が「雑報」や「雑録」に収録されていた。一方『太

陽』はというと、創刊号である第一巻第一号（明治二十八年一月）では、「地理」欄に「京都の新案内記」と京都の名勝の写真、「利根水源探検紀行」が載せられており、この「地理」欄は名所案内と紀行文のどちらの性質も併せ持っていたことが分かる。

そのような状況の中、『文芸倶楽部』においても明治二十八年七月号において、「詞筵」の中に「紀行」という分類が登場した。しかしこれは目次のみの表記で、本編の「詞筵」では「紀行」とは銘打たれておらず、「紀行」として掲載されたと思われる韻文による文章が掲げられているのみとなっている。これ以降、時折紀行文や名所案内が「詞筵」に収載されることもあるが、その際は韻文でないものも多い。また、明治二十九年九月号の目次にも「詞筵」に「紀行」が収載されているとあるが、ここにおいても同じく目次のみとなっているなど、分類に曖昧さがうかがえる。

明治二十八年八月号「雑録」には、恋川子による「避暑必携武相名所（写真版解）」がある。これは題名にも「写真版解」とあるように、この号には「武相名所二十八景」の写真が挿入されており、写真が付された名所案内の記事となっている。

また、明治二十九年十一月の臨時増刊号においては「雑録」に紀行文が並び、その一つひとつの作品名が目次に掲載された。さらに、このあたりから掲載される紀行文や名所案内がそれぞれ長文化していく傾向にある。

明治三十一年七月には先述の通り「旅之友」と銘打たれた臨時増刊号が刊行された。「旅の葉」や「旅の趣味」といった項目で旅に関して説かれ、「山容水態」において紀行文が掲載されるという内容であった。

このように文芸雑誌『文芸倶楽部』では、当初総合雑誌『太陽』との差別化をはかるためか、地理や紀行に特化された欄が設けられることはないままであった。しかし、その『文芸倶楽部』であっても、紀行文・名所案内の収録数やそれらの一編あたりの紙幅が徐々に増加していったという動向は、文芸雑誌の読者層においても見知らぬ土地を知ることに対して大きな需要があったということとを明白に示しているだろう。

そして明治三十二年四月号において、避暑地案内の投書を募集する呼びかけが誌面に載ることとなる。

矢弾丸より早き月日にも負ぬ勢ひにて、今より『避暑地案内』の欄を新設し、又々愛顧諸君の御投稿を煩はし度、左の各項に就て何卒簡明なる御報道希望仕り候。但し本誌の五月六月七月八月九月の五ヶ月に掲載仕り候積りにつき、其思召しにて後れざるやう願上候。

○温泉場○海水浴場○山水の風景○土地の便不便○宿泊料の概略○名所旧跡○旅費（何処より何処までといふ概算）○飲食物の便不便等

尤も有名なる所にても、あまり世に知られざる特色と思し召すものは御斟酌なく仰せ下され度候。尚字体は明瞭に且つ封書の脇付に『避暑地案内』の五文字お書添の程願上奉り候。

この「避暑地案内」欄は同年五月号より開始され、八月号では二十八編もの避暑地案内が並んでいる。

この八月号には「本誌の避暑地案内は本号限りにて撤去し、次

号よりは更に『勝地案内』なる一欄を設く今や汽車汽船の便大いに開け、従つて旅行者の頗る多くなりし時、此欄の新設亦必要と存じ候」として「避暑地案内」の募集内容を引き継いだ投書募集が掲載された。そして、明治三十二年九月号以降、『文芸倶楽部』では「勝地案内」欄が常設化されている。この「勝地案内」はのちに「勝地」へと姿を変える。

また、明治三十三年六月号では「勝地案内」欄と並行して「諸国名水」欄が加えられた。さらに「諸国風俗」「名家墳塋」等さまざまな新設欄がおこり変遷していく様子からは、交通機関の発展に基づき、全国各地の地勢・文化を紹介していくことが関心の的であったことが見て取れる。

ここで付け加えておきたいのは、明治三十二年十月号という、「勝地案内」が誕生して間もない『文芸倶楽部』において、「『美文』を募る」という掲示がなされていることである。

人は文壇寂寞を称すれども、我本誌の詞華愈々隆を極め盛を致す、されば爰に大方に向つて美文を募り、大に斯壇の鼓吹者たらんことを期す、唯それ紙面に限あるを以て洗練鍛冶を積める小品文の中に就て、これが秀を抜き、これが粹を選び、以て完璧に近きものを載せんとするの希望なり、即ち投書用紙を二十行二十字詰とし、紙数三枚以下を限る、這般其第一着として題を、秋の森とし、秋高星稀の好時節を謳歌せんと欲す。乞ふ、江湖の秀才諸君、其錦心繡腸を叩け

ここでは、「以て完璧に近きものを載せん」としているとある

が、これ以降の『文芸倶楽部』に該当の作品は確認できない。この投書募集はもう一度だけ明治三十二年十一月号に題を「雪の朝」と変えられたものが掲載されるが、同じく該当の作品は確認できなかった。先述の通り、美文という文章ジャンルには当時からすでにさまざまな見識の間に齟齬が見られているが、この『文芸倶楽部』においても、「美文」に関する認識が読者と編集の間で食い違っていたのだろうか。読者が考え投稿した「美文」の作品の中に、編集の考える「美文」がなかったために「以て完璧に近きもの」がなく、掲載されることがなかったのかもしれない。

同時期の明治三十年十月、『早稲田文学』第七年第一号では「美文」という項目が立てられた。以降この「美文」欄には小説、戯曲、短歌など多岐にわたった作品が収録されている。誌面改変前である明治三十年九月の第四十一号に掲載された予告には「美文」欄を置いて、同じく名家が新作の脚本小説類を収めることは依然たり、但し論説欄は言ふに及ばず、美文欄にも一篇づつ、は毎に一二回読切の佳篇を載せ、以て諸君の趣味を新にせんと力むべし、材料の精選と豊富とに於ては、当に刮目すべきものあらん」と述べられており、「美文」の定義は見られない。『文芸倶楽部』では「美文」というべき作品が掲載されることがなかったのに対し、『早稲田文学』では明確に定義された「美文」というよりむしろ、小説や脚本などあらゆる作品を包括した呼称とされていたといえるだろう。

このように当時の「美文」は雑誌によっても、さらには編集と読者によっても定義が曖昧であり、共通認識ができていたとは言い難い。しかし、ジャンルとしての「美文」の実体は明らかでは

ないが、この「美文」の構成要素のひとつとして挙げられる美辞麗句は、『文芸倶楽部』においては紀行文や名所案内といった叙景文に見ることができるのである。

### 三、数値化される風景と美辞麗句

さて、前章まで確認してきたように『文芸倶楽部』において紀行文や名所案内は主に「雑報」「雑録」から始まり、のちに「勝地案内」として投書を募る欄が新設されたこともあり、誌面を賑わす存在となっていた。世情に呼応するように開始されたこの欄はしかし、明治三十八年三月に刊行された第十一巻第四編以降見られなくなった。一度だけ明治四十年六月の創業二十周年記念増刊号「ふた昔」において「勝地」欄は復活したが、やはりそれ以降「勝地」欄が継続されることはなかったのである。先述の第十一巻第四編では、「勝地」のみならず「風俗」という欄も外されている。このことから、全国各地の勝地や風俗といった地理的な紹介がなされた文章の掲載に対し編集方針が変更されたため、「勝地」欄や「風俗」欄が誌面から姿を消したと推測できる。

結論から言ってしまうと、この約十年間の紀行文や名所案内における風景描写において、終始美辞麗句は用いられている。まず、とりわけ数多く用いられていた美辞麗句表現を紹介していく。

赤間福間の辺にいたらば、一帯の根丘すべて此れ矮松、幹は老ひ枝は低れて靄々たる翠色滴らむとし、風致掬すべし。(春

山鶴峯「鎮西めぐり」明治三十二年七月号)

翠色滴らんとせる一大老松あり、『由縁の松』と云ふ、(来往生「由縁の松」明治三十四年四月号)

其間二十丁余松樹森々枝を翳して翠緑滴るが如く白砂清く敷きて(村井香風「阿漕が浦」明治三十四年七月号)

忽ち老松の翠滴らんばかりなるを見る。(木村小舟「東濃の仙区(承前)」明治三十七年六月号)

「翠色」や「翠緑」などが使用されている「翠色滴る」は、これらのように主として松の美辞麗句として用いられている様子が確認できる。さらに、例示した美辞麗句の中にも見られるが、この美辞麗句は、「白砂(沙)」と結びついて用いられることも多い。これに関しては「白砂青松」という四字熟語があり、例えば、四字熟語そのもので表現しているものや、「磯馴松は龍の蟠つてあるかとも思はれ、白い砂が日に晒されて、雪のやうである、(中略)松は青く、砂は白く、(乙羽庵「舞子の浜」明治三十年四月臨時増刊号)」のように松と砂の様子をそれぞれ描いているものもある。

この表現は、明治二十七年に刊行され、当時の人びとに大きな影響を与えた志賀重昂『日本風景論』に登場している表現である。

茲に真成の「白沙」を成し、青松其間に点綴して初めて所謂「白沙青松」の風景を現じ来る。<sup>2)</sup>

『文芸倶楽部』においても明治二十九年十月号「雑報」に「▲志賀重昂氏 日本風景論を著して世評高かりき」との評が掲載されている。『文芸倶楽部』においても極めて数多く用いられている表現であり、当時の人びとの間においても流行していたことは明瞭である。

翻つていえば、全国各地の勝地についての紹介文が募られた場合に、どのような景色を(名所)と捉えるかという点において、当時の投書にいそしむ読者からすると、このような定型化された表現によって描くことができる(風景)、美辞麗句を用いることができる(風景)こそが(名所)だと選ばれ、投書に結びついていったのかもしれない。

続いては水に関する美辞麗句について見ていきたい。本調査において、(水)についての美辞麗句も数多く確認された。

(水は「引用者注」一丈にも及べる岩石の上を難なく飛越え跳越えて、雪と散り水と乱れ、或は水晶<sup>ミツクリ</sup>廉<sup>レキ</sup>をかけたることく、或は銀波を湧したるが如し。(田山花袋「不遇山水(口絵参照)」明治二十九年十一月臨時増刊号)

遠近の山は低く高く蜿蜒波瀾の状をなし銀蛇の如き大井川此間に流れて風光さながら畫の如し(不識庵聴秋「秋の旅」明治三十二年十二月号)



迸発せる水流は、宛然銀蛇の邁奔するに似て、(木村小舟「東濃の仙区(承前)」明治三十七年六月号)

このように主に河川の水について、「銀波」「銀蛇」と表現している。さらに水の表現に関してもうひとつ挙げておこう。

舟は行くこと速なれども海面静なること鏡の如くなれば、(島崎藤村「松島だより」明治二十九年十一月臨時増刊号)

近くは清麗鏡の如き児島湾を抱いて(鳥城浪士「吉備の由加山」明治三十二年八月臨時増刊号)

水面が穏やかな様子を、鏡とする表現も長く用いられ続けている。また、水の流れる様子として「端山の月の谿水に碎けて黄金、白銀の玉を散らせるさまは、(大阪日比野宗次「箕面山」明治三十二年五月号)」「堂を下り右へ芝生を行く一丁余にして雲の滝あり、玲瓏玉の如し、(探勝旅人「閑居山」明治三十二年五月号)」のようにその様子や水音に関して「玉」に例えているものが数多く見られた。

さらに、山の様子では、次のような美辞麗句が挙げられる。

両岸は嵯峨たる巖壁よりなり。(中略) 両岸の巍峩たる巖、(をぐら「耶馬溪下」明治二十八年十月号)

峨々たる巒岡竈の如く峙ち鬱蒼たる老樹四隅を囲み(手塚秀輔「岩井の四十七滝」明治三十三年九月号)

連山屏風の如く聳え大樹繁茂し奇岩怪石鬱勃として突立し、(中略) 此峨々たる翠巒岩角に幾多の瀑布懸れり、(静爛逸人「山城鷲峰山」明治三十四年四月号)

このような「嵯峨たる山」「峨々たる巖」などの表現は、〈山〉に関する美辞麗句表現としてとりわけ多い。

これら〈水〉と〈山〉に関する美辞麗句はさまざまな場面で用いられている。『文芸倶楽部』では「勝地案内」に加えて「諸国名水」が新設されていたように〈山水〉を描くことが主題となっていたと推測できる。これらの美辞麗句が数多く抽出されたのは、先述の通り、こういった美辞麗句で表現できる風景こそ〈名山水〉であるとの意識があったからだといえるだろう。実際に、『文芸倶楽部』における名所案内では、〈山〉から〈水〉が流れ落ちる風景である〈滝〉が題材にされることが数多く、同じ号において複数の各地の滝が掲載されていることも時折見られる。

このように、紀行文や名所案内における美辞麗句表現は、類似した表現がどの時期においても確認できるという結果となった。ここで注目したいのは、以下のような表現である。

岩尾の瀑布は、一に観音の滝ともいふ、国防国玖珂郡神代村に在り、天神山の半腹より落ちて瀑布をなす、高さ二丈、幅二間余、

ここでは、滝の大きさを「高さ二丈、幅二間余」と数値を用いて表現しており、正確な数値である印象を受ける。これは明治三十二年五月号「避暑地案内」の白菊「岩尾の瀑布」の一節であるが、この頃より「風景」を数値化する試みがさわめて多く見られる傾向にある。同時期の明治三十二年は四月に刊行された第五巻第五編に「避暑地案内」の投書を募集する掲示が掲載されている。

それまでの数値化された土地といえ、

房州鋸山日本寺 鋸山の中腹に在り、加知山を距ること一里二十町、山麓の市街保田より登ること凡そ二十町許、保田は東京往復の漚船常に碇繋する所なり、寺中名跡多し。(二橋生「青山白水(口絵解説)」明治二十九年九月号)

に代表されるように、道程についてのが主であった。こういった道行き案内として距離が書き記されていることは一般的であったものの、それはあくまで案内のためのものであり、風景を綴る上では、ほとんど美辞麗句のみが用いられていた。

ただし、創刊当初の明治二十八年八月号に掲載された恋川子による「避暑必携武相名所(写真版解)」では、以下の表現が見られた。

庭内調の滝は高さ十五丈幅五尺、形ち数條の絃を懸けたるが如く水声亦琴音と相似たり、

創刊当初の『文芸倶楽部』において、この「避暑必携武相名所(写真版解)」以外にはこういった数値化された表現が見られなかったといえよう。

しかし、先ほど述べた通り、「避暑地案内」から興った「勝地案内」以降、数値化された風景が提示されていくこととなる。

浜は白沙一帯二里の間一直線を畫がき其上には青松常に繁茂す、(中略) 岩上に二三の矮松の吹き上ぐる海風に蟠龍の形をなして落ちんとして落ちざる如く、(宮地四万「桂浜」明治三十三年一月号)

◎都恋しき片枝の松 は相生松の傍にあり、高さ三間東西十五間、南北十間の広さに蟠り枝葉悉く東方に向ひ、(赤穂柏井柏葉「播州四勝」明治三十三年四月号)

瀑布の高さ十一丈二尺、幅三間余、飛沫は柳絮の風に乱る、が如く、又白玉を散らすが如く、(中岡彦次郎「箕面の滝」明治三十三年九月号)

土肥の大杉 山中に大なる一本の杉あり其周囲は五丈許りにして枝葉密叢して一見すれば松の如く(相模加藤富太郎「湯河原温泉」明治三十四年五月号)



それまでは意識されずに道程を案内すべく用いられていた数値であったが、これらの表現が「勝地案内」欄の新設の頃より見られるようになったことから、勝地として、より正確な風景を伝えることが意識されはじめたために具体的な数字を引き合いに出すようになったといえるのではないだろうか。その土地の特有の風景を「勝地案内」欄において差異化して紹介するために、数値を用いて風景を描写しようとする試みがなされたのは自然な流れである。つまり、正確な風景を読者に想像させることが重視されはじめたといつてよい。

しかし、こういった数値が記されていく動きがおこりながらも、美辞麗句表現は衰退することはなかった。数値によって説明された風景には、必ずといってよいほどに、美辞麗句が付与されていたのである。

そして、数値化された風景と美辞麗句が混在する文章が掲載され続ける中、明治三十六年四月には、この数値化に対し、次のような主張が述べられた。

都人は隅田の桜を形容して長堤十里、白雲の飄颻たるが如しと言つてゐるが、それは詩文の上での大いにおまけがあるけれど、当地のは掛値なしの一里はあると言ふことだ。(下総 泉対梅郎「三咲の桜」明治三十六年四月号)

これまで例示した正確な数値ではなく、「詩文の上での大いにおまけ」もあるというのである。実際に、『文芸倶楽部』においても「崖に沿ふて、段々登つて行くと、崖の尽る所に瀑が数十尺

の高さから落ちて居て、(松田宗三郎「岩内瑞巖寺」明治三十三年三月号)」など、「数十丈」「数十尺」という大まかな数値が見られることもあった。

また、『風俗画報』第三十九号(東陽堂、一八九二年三月)に掲載された、わま「むかしの梅見」には、すでに「梅屋敷」の様子として、

薫香至て深く形状宛も龍の蟠り臥か如く園中四方数十丈間に蔓て

という記述が見られる。この「数十丈間」とは正確な数値ではなく、その梅園の風景の壮大な美しさを強調するための仮想的な〈広さ〉の表現であるように捉えられる。つまり、実際の風景を正確に説明するための数値ではなく、あくまで読者に想像させようとした風景をさらに広げていくための数値化がすでに存在していたのである。

前掲の美辞麗句集『美文之資料』の「山水景象」という項目においても「幾個の峰巒は轟々として天を攢し、險峭断岫数千尺」という美辞麗句が確認できる。美辞麗句と数値化は一見対極のようにも思われるが、こういった数値化は、もはや定型表現とも言ふことができる。壮大な情景を表現するための定型化された美辞麗句表現がすでにあつた中で、実際の風景の寸法を細かに書き記すという数値化の動きがおこつたのである。

さらに、こうした数値そのものの揺れを越えて、数値化された風景は、もうひとつの転機を迎える。明治三十七年一月号の「勝

地」に収録された坪谷水哉「耶馬溪Ⅱ対Ⅱ甲州御岳」は、次のように述べている。

尤も山の高さなどは段々精密の測量が出来た為に、久しい間加賀の白山が、富士山に次で日本第二の高山と言はれて居たのが、今は実測の結果、高さに於て信州御嶽や越中の立山よりも、却て低いということが分つたが、溪山の眺望となると、とても斯く明瞭に測定することが出来るもので無いから、矢張り美人の資格と同じく、肥大つた楊貴妃を愛する玄宗皇帝もあれば、細腰を好んで多くの官女を餓死させた楚王もある。

山の高さや川の長さなどの数値だけでは、その「溪山の眺望」を「測定」したことにはならない、と数値そのものを疑問視する声が上がったのである。実は数値が散見されるようになった明治三十三年の時点で次のような記述も見られた。

夫れ斧柯峡凡そ二里、耶馬溪の三分一に過ぎず、然れども山岳連続し、奇巖怪石妙趣異状を呈し人をして応接に遑有らざらしむ、是れ即ち耶馬溪と勝を争ひて決して劣らざる所以なり、耶馬溪は穩秀にして快濶、斧柯峡は奇峭にして幽邃、彼は大人の風あり、此は高士の態あり（落合東郭「斧柯峡」明治三十三年五月号）

奇しくもどちらも耶馬溪に対し、数値としては劣るものの、景觀としては負けていない、と主張した名所案内である。

このように数値によって風景を提示しようとすることは結果的にその数値の大小のみに依った景觀の優劣がついてしまうため、さまざまな勝地の景觀を紹介しようとした際に、数値化は疑問視された。事実、先の「耶馬溪Ⅱ対Ⅱ甲州御岳」が掲載された明治三十七年頃になると、投書する人びとの中にも同様の意識があったのか、極端に数値化された風景は大幅に減じている。

『文芸倶楽部』では、「勝地案内」欄の創設によって地理的な側面がより意識されはじめ、数値を用いて実際の風景を紹介しようという動きが高まっていた。しかしながら、正確な広さや大きさを想像させるべく急速に進んでいった数値化は、土地ごとの風景を名勝として文章で伝えようとする際の妨げともなっている、徐々に減じていったのである。このように、固有の風景を具体的に描写したいとしながらも、数値化に対して懐疑的になっていったという動きは、美辞麗句が、異なる土地の風景でありながら定型の表現によって描くことで風景を同質化してしまい、差別化された具体的な風景を描くことができないにもかかわらず、用いられ続けていたことにも重なっているだろう。

#### 四、写真と「絵とき」の相補的關係

もう一方で、風景写真と叙景文について考えたい。『文芸倶楽部』では明治二十八年四月号から風景写真の挿入が見られる。しばしば口絵は「美人と風景」や「千紫万紅」等と題された写真欄が誌面を彩っている。風景写真の挿入はまったく珍しいものではなかった。

そして先にも触れたが、明治二十八年八月号では「武相名所二十八景」という写真が付され、その「写真版解」として恋川子による「避暑必携武相名所」という案内記が掲載されているのである。ここでは、写真の解説という位置付けであるはずだが、前章においても取り上げた通り、美辞麗句が数多く見られる。

これと同様に、「口絵説明」や「絵とき」として著わされた文章には美辞麗句が散見する。明治二十九年九月号の二橋生「青山白水（口絵解説）」を例にとる。この名所案内が「雑録」に掲載された第二巻第十一編は、目次を見ると、八頁にわたった「千紫万紅 写真銅版刷」においてさまざまな風景の写真が紹介されている。「青山白水」の冒頭では、次のように述べられている。

その真を写し、その精を抜で、誰が目にも、これは何処の景なり、何国の山水なりなど思はしむるもの、写真の術に如くはなし、こゝに挙げたる二十五勝、北は奥の松嶋より、南は周防に至るまでの間の、尤も優れたる名所旧跡を、年来この技を練磨して、今は他に及ぶ者の無きまでに上達し給へる、斯道の黒人光村利藻君の撮影せられたれば、悪からう筈無く、絵にも文にも、及はぬ恋と諦めて、学者筆を擱き、畫家刷毛を投ぐる中を、唐突ヶ間敷く、絵解の詞をつけて見れば、あらまし斯ふでもあらふか。

当時の紀行文には写真家が同行しているという記述も多く見られる。また、このように写真には適わないとしながらも、写真のみを挿入するのではなく、その解説として文章が掲載されている

ことが多く、そこには文字で表現することによる独自の意味作用があったといえるのではないだろうか。例えば「青山白水」から以下の一節を見てみよう。

舞子浜の青松白沙 一帯の白沙、瀾灩鏡の如き清波を嘗め、而も漣漪静にして、舟往く春の如し、青松あり、新苔日に黒みて、老幹蟠屈、竜嘯かんとす、此地昔は公郷の過ぐる所、爾来松風村雨の曲、世に伝へられて、土佐氏の粉本に入ること久し。今も尚ほ其俤を変ぜず。

ここでは、前章においても確認した美辞麗句が用いられるとともに、土地の由緒が記されている。この「青山白水」では、引用箇所「舞子浜の青松白沙」のように景色ごとに項目を立てて説明を行っており、そのほとんどに、美辞麗句を駆使した風景描写と、地誌に類似した説明やその地までの道程等がどちらも記されているのである。こういった文章は『文芸倶楽部』では「絵とき」等と呼ばれ、たびたび収録されており、一編あたりの紙幅も紀行文や名所案内の文章に比べても引けを取らない。ここから、これらの目的は、単に写真が主題となり、それに若干の説明を加えるだけというのではなく、「絵とき」には「絵とき」の役割が与えられていることが看取できるだろう。写真によって得られる実際の風景だけではなく、美辞麗句によってその風景が描かれることで、鑑賞の際により美しい土地のイメージが構築できるのではないだろうか。

また、「口絵」に景色の写真が紹介され、それについて「雑報」

でわずかに数行の「口絵説明」が加えられることもあるが、その短い文章がすべて美辞麗句で構成されていることも多々見受けられる。さらに、『文芸倶楽部』における「雑報」に、季節によつて見頃の観光名所が数行ずつ紹介される際にも、美辞麗句のみの紹介文となっていることが多く、正確な風景を書き記すことよりも、素晴らしい景色であることを読者に訴えかけ、読者の頭の中に美しい風景を創造させるという側面が強調されている印象となっている文章が多く見られるのである。

明治三十二年二月号の時報には、明治三十二年に刊行された大橋乙羽『千山万水』に関する評が「時報」に寄せられている。

斯は同氏（乙羽―引用者注）が第一の道楽なる旅行と第二の道楽なる写真とを一からげにせし書冊なれば素より悪からう筈なく、且つ氏が尤も長ずる絵畫の美文は、所謂千山万水を紙面に幻出せしめて、嵐光水色眸中に落る思ひあり。

さらに、続く明治三十二年三月号の「時報」にこの『千山万水』の評の続きが掲載された。

氏の長所を集めし書冊に向つて批評らしきこと言はんは素より野暮の沙汰ながら、強て一言を費せば、其文の面白く絵畫的に詩趣あるだけ夫れだけ実景に遠ざかりて、言は、景容沢山に流るゝ瑕疵あり、併し斯は氏の短所にして長所なり、言はずもがな。

この「絵畫的美文」とは、「現出」ではなく「幻出」という語が用いられていることから明白な通り、ここでは実際の風景そのものを想像させることではなく、ことばによつて風景を創り出させることを指している。つまり、「現出」させる写真に対して「幻出」させる（ことば）の役割が認識されており、そのどちらをも含む書であると評価した文章であるといえる。

さらに、「詩趣」に富んだ「絵畫的美文」と実際の景色との乖離は、「短所にして長所」であるとして概ね好意的に解釈されている。

翌年の明治三十三年に刊行された『続千山万水』に関する饗庭篁村の評である「続千山万水序」（明治三十三年一月号）には、次のような記述が確認できる。

しかるに乙羽氏また一大幻術あり、其一望一景古へを懷ふに足り今を賞するに足るところに到れば、一個の怪しき小箱を取出し、不思議の手付をなすと等しく、天下の名山大川は忽ちに吸取られて其箱の中に在り

先に紹介した評と共通しているのは、「幻出」「幻術」ということばである。さらに、饗庭篁村は「此幻術の上にまた、筆端より雲霧を生じ、妙文たちどころに花を点く、見る者読む者駭然として、身もたゞ其箱の中に吸入られたるが如し」と述べている。

風景の写真が付された大橋乙羽の『千山万水』『続千山万水』に対する評価として、「絵畫的美文」の機能は、写真とは異なり、このように幻を映し出すことだとされているのだ。

加えて、確かに写真は正確な風景を写し取り、人びとに与えることができるものではあるが、当時の写真はまだ不明瞭でもあり、風景そのものを実感させる情報として、現在ほどに機能したとは言えない。これまで述べてきたように、美辞麗句は視覚的な情報である写真におさめられた風景を補うことも担っていたのではないだろうか。それは、単に実際の風景を見するという行為だけでは得られない、その場全体の情景や雰囲気を描き出し、その土地を読者の頭の中に再構築させるということである。そしてそれは、文字だからこそ行うことができる表現方法であり、文字だけが持つ機能であつたといえるだろう。

『文芸倶楽部』に掲載される「絵とき」やこうした評価に共通しているのは、数値化された説明や写真による〈風景描写〉と、美辞麗句による〈風景描写〉のどちらにも役割を見出していたということだろう。

単に読者に正確な風景を伝えたいということが主眼であつた場合には、写真の挿入と道程等の説明のみで十分であるといえる。しかしながら、写真が付されているにも関わらず、美辞麗句が多用された文章が衰えず、さらには、写真によって風景が提示されている土地に関して、全く説明を行わずに美辞麗句のみで飾り立てていることさえある。これは、写真の導入がおこつてもなお、〈ことば〉によってのみ表現できる〈風景〉が求められた結果ではないのだろうか。こうした一連の動向は、風景描写という点における〈ことば〉の役割が再認識されていく過程であつたのかもしれない。

## 五、おわりに——「文字のための文字」という機能

第一章においても示した小島烏水は

漢文の紀行文は要するに「文字のための文字」であるから、その地は則ち空天幻地、その文は則ち仮設虚構、（中略）しかも漢文紀行の中に、最も誦すべき好文章が多いかの如くおもはれてゐたのは、その作者が比較的に学殖があり、その文字が最も豊饒であつた、めに、巧に之を斡旋さへすれば、人は単に文字の上の魔力にのみ惹きつけられて悦んでゐたので<sup>③</sup>

との批判を示している。ここで烏水が批難した「漢文紀行」とは本稿第一章にも例示した烏水の「漢文形容語彙纂」といひつべき所謂「紀行文」という主張にもある通り、この論の中には単なる漢文体で記された紀行を指すものではなく、「文字の上の魔力」によってよいとされてきた、つまり、内容ではなく表現の面に重きを置いた文章自体への批判だと考えられる。

明治四十年に刊行された西村真次『紀行文作法』通俗作文全書第六編（博文館）では「然れども作者は常に紀行文が美文即ち詩的散文（或は散文詩）なることを忘るべからず」との記述があるものの、「美の分子」がありすぎる「想化（Idealize）」された文章において「己れが叙述せる土地の状況を他人に理解せしめざるが如きことあらば、それは紀行文としての価値も資格もなきものと云はざる可からざるなり」と述べており、美文という側面を捉

えながらも土地を正確に描くという側面に価値を置いている。

さらに、田山花袋は、明治四十二年に次のように述べている。

近頃、紀行文の面白くないことを言はれる人が大分ある。何うも千篇一律でいけない。何処の山を描いても皆な同じ山、何処の水を描いても皆同じ水、何処の村落を描いても皆な同じ村落で面白くないこんな文章なら書かん方が好いと言ふ人さへあります。

これまで確認してきたように、定型句となり美辞麗句集に採録されているような美辞麗句を用いた風景描写を「千篇一律」と批判している。花袋はこれに続き、その土地ごとの地勢や風俗などを描いていくべきだと主張しているのである。さまざまに異なる土地を描いているはずが同じ風景となっていることはもとより、表現の同一性への批判がなされている。このように、のちに〈特有の土地〉を描いていない紀行文を難じた声は数多く、翻つて言えば、そういった観点にのみ回収されてきたのである。つまり、美辞麗句を用いて「幻出」させられた風景は実際の風景ではないとし、批判の対象となつていったのである。

しかしながら『文芸倶楽部』における叙景文では、文芸雑誌という媒体の中で、美辞麗句という表現が果たした役割が確実に存在していた。美辞麗句は、〈ことば〉によつてのみ描ける風景を読者に創造させていたはずであり、単に「紀行文」として実際の風景を描くことができなかったという側面のみが取り上げられるべきではないだろう。こうした〈ことば〉の可能性と「文字の上

の魔力」に取り憑かれ、「文字のための文字」という姿勢を共有していた人びとも少なからず存在していたのである。こうして著わされた叙景文が、単に現実の風景を再現するのではなく、言語的な風景を構築していたというこの意味合いや意義を、時代ごとに検討していくべきである。

こうした美辞麗句が明治三十年代における文芸雑誌上で頻繁に用いられ、そこに意味を見出すことができるということから、当時の美辞麗句が担っていた「幻出」という機能を再評価すべきだといえるのではないだろうか。

## 注

- (1) 小島烏水「紀行文に就きて」(『文庫』第十三巻第六号定期増刊、内外出版協会、一九〇三年八月)。
- (2) 志賀重昂『日本風景論』政教社、一八九四年。
- (3) 小島烏水「紀行文に就きて」(『文庫』第十四巻第二号定期増刊、内外出版協会、一九〇三年九月)。烏水のこの文章は注(1)にもある通り「文庫」に二度に渡り掲載された。第十四巻第十二号には「(二三) 紀行文と写生」が著されているが、副題として「附漢文及漢文直訳調の紀行文を難ず」が付されている。
- (4) 田山花袋「小説作法」博文館、一九〇九年。

※引用の際、旧字は新字に改め、傍点・ルビ等は適宜省略した。

※本稿は二〇一五年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SF R)による研究成果の一部である。

(ゆもとゆき 大学院後期課程在学)